

J-PETS第14回例会

with コロナ時代のペットとの関係
獣医師に聞く”獣医師の社会的役割とは”

日本ペットサミット
西村亮平

テーマ1：獣医療関係者は essential worker？

テーマ2：貧乏人はペットを飼っちゃダメなの？

テーマ3：ペット数は持ちなおすのか？

テーマ4：その犬安楽死しますか？

テーマ5：猫は室内で飼わないといけないの？

話題提供1：ペットがパンデミックの原因になる可能性は？

話題提供2：獣医師はステークホルダーの一人である“社会”に対してどう振る舞うべきか？

2020年8月22日（土） 13：00～15：00 オンラインシンポジウム

進行：西村亮平先生（日本ペットサミット会長、東京大学獣医外科学研究室教授）

西村先生（西村）：今回は Web を利用して開催する初めての例会です。いろいろと不手際も起こるのではないかと危惧していますが、そこは J-PETS の“いいかげんさ”で乗り切りたいと思います。どうぞよろしくお願いします。今日の例会は『with コロナ時代のペットとの関係、獣医師に聞く“獣医師の社会的役割とは”』というテーマで行いたいと思います。わかりやすい方がいいかと思いましたが、獣医師にこだわっているわけではありません。ですので、獣医療に関わる方、あるいは動物に関わる方、ということで幅広く受けとめていただければと思います。では早速始めていききたいと思います。



最近、ペットの飼育者がすごく増えているという話をよく聞きます。犬を飼い始めたよ、という話を聞くことが多く、実際に新聞などを見てもペットの需要が高まっているとか、バカ売れしているという状況があるようです。何故なのでしょう？それは、おそらくこういうことなのではないかと思えます。

コロナの状況下、社会的な距離を遠ざけるために人と人との接触がすごく減ってしまうという状況になりました。そうすると人間は「会いたいね」とか「飲みに行きたいね」といった話をよくするようになります。人間というのはやはり、家族の単位を超えて、人と人との結びつきをかなり重視する特殊な社会構造で生きているのだと感じます。そしてコロナの状況では、人が人との結びつきを求めるように、犬との結びつきをより求めたくなった、というようなことが起きたのではないかと想像しています。なぜなら、人と人との関係と同様の関係が、犬と人間の間にもあるからです。

 J-PETS

犬はなぜ“家畜化”されたのか？

- 人間側から
 - 外敵が接近した時に知らせてくれる
 - 狩猟のパートナーとなる
 - 食糧や毛皮の供給源となる
- 犬側から
 - 餌と安全が得られる

長年にわたる深い結びつき

↓

精神的交流



なぜ犬は人間に家畜化されたのか？という観点から考えますと、最初はお互いに利益があったところから始まりましたが、そこから長きにわたって生活を共にし、いまでは精神的な交流ができるようになるほど遺伝子レベルでも変化してきていることがわかっています。コロナの状況で犬を飼う人が急増したのはこのようなことがベースにあるため、それが明白になったとも言えるのではないかと思います。

それではこれからいくつかの命題や例題を挙げていきますので、それに対して皆さんがどのように考えるかご意見をお聞きしながら活発にディスカッションをしていきたいと思っております。ぜひ様々なご意見をお出してください。

 **日本ペットサミット**
どうぶつ達と共に暮らす幸せな社会をつくる会

どうぶつ達と共に暮らす
幸せな社会をつくる会
For the harmonious society with animals



設立の目的
どうぶつ達と共に暮らす幸せな社会をつくること

事業
目的を達するために、次の事業を行います。

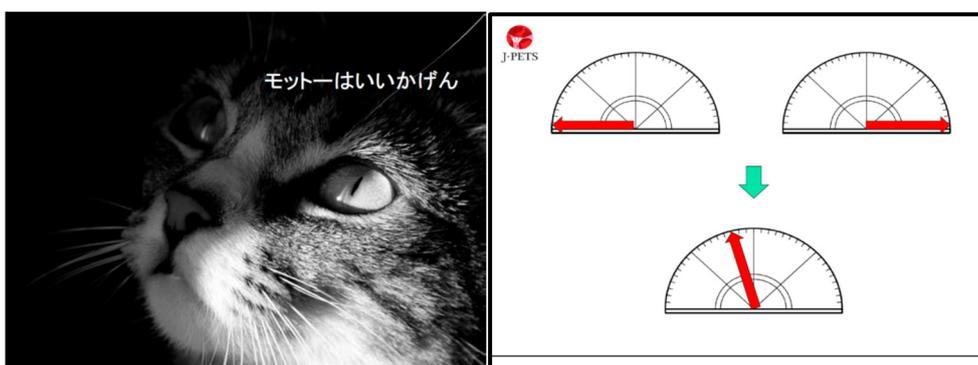
1. シンポジウム、セミナー等の開催
2. ポータルサイト、ソーシャルネットワークを活用して目的の達成に有用な情報の収集、解析とその積極的な発信

<http://www.j-pets.jp/>

日本ペットサミットは、人とどうぶつたちがともに幸せに暮らす社会を目指す、ということではいろいろな活動を行っていますが、私たちのモットーは“いいかげん”というところにあります。世の中には左向きの意見もあれば右向きの意見もあります。それはそれで構わないのですが、原理主義的になってしまうと世の中まったく進んでいきません。その間を取るようなベクトルを見つけていかないと、世の中は進歩していくことができないと思っています。カナダの動物愛護関係の法律を例にあげると、その時にまさしくこういうベクトルを見つけていくような動き

が起り、どんどん改正が進められたそうです。いろいろな意見を出し合い、カナダという国として一番良い道はどれか、それを見つけていったというような動きです。お互いの意見を認め合う土壌がないと、そのようなムーブメントが起こることはないでしょう。

“これでなければ私は一切受け付けない”と、異なる意見を持つ人たちを攻撃するようなスタイルでは世の中まったく動かないことになってしまいます。この会は決してそのような会ではないということをご理解いただいて、ご参加していただければと思います。少しカッコよく言えば、私たちのモットーは“寛容性”ということです。“いいかげん”というよりも寛容性という言葉を使った方がカッコいいですね。けれど、その実態は“ゆるい”ということなのだとも思っています。



【テーマ1：獣医療関係者は essential worker？】

西村：最初の命題ですが「獣医療関係者はエッセンシャルワーカーなのか？」ということをお聞きしたいと思います。エッセンシャルワーカー、またはクリティカルワーカーとは、人間が社会生活を維持する上で不可欠な公的・民間部門の仕事に携わる人のことを言います。獣医療に携わる人は、はたしてエッセンシャルワーカーなのか？ということなのですが、皆さんはどう思われますか。

緊急事態宣言時に休止を要請された施設(東京都)

3 社会生活を維持するうえで必要な施設

種類	施設	休止要請	備考
その他	理髪店	対象外	【要請内容】 適切な感染防止対策の協力を要請
	美容院	対象外	
	銭湯（公衆浴場）（※）	対象外	
	貸倉庫	対象外	※物価統制令の対象となるもの
	郵便局	対象外	
	メディア	対象外	
	貸衣装屋	対象外	
	不動産業者	対象外	
	結婚式場（貸衣装含む）	対象外	
	葬儀場・火葬場	対象外	
	宿屋	対象外	
	獣医	対象外	

東京都が緊急事態宣言を出したとき、“獣医”は休止要請施設の対象外でした。どうやら獣医は社会生活を維持する上で必要な施設だと認めているということなのですが、動物病院でもなく獣医師でもなく、“獣医”と書かれていたのです。そこに、都の理解がないことがよくあらわれていると感じます。私の話をしますと、勤めている動物医療センターは大学にあり、大学自体が厳しく活動制限をしたため、東大病院は規制から外れたものの動物医療センターは休診しなさいという状況に追い込まれました。しかし、いきなり休診するわけにもいきませんので、緊急性の高いものに限りまると言い訳をして最低限の診療を行うことにしました。ただし、もしそこで感染者が出たら、大学の方から責任を取れと集中砲火を浴びることになるのは明らかでした。そのときに、医療って何だろう、動物病院・獣医療って何だろうと考えるに至ったのです。もし獣医が休んでしまったら犬が死んでしまうかもしれない、だからエッセンシャルワーカーだ、というふうに考えられます。しかし、はたして社会はそうに考え、求めているのでしょうか。その辺りがどうなのかを皆さんに伺ってみたいと思います。

A さん：獣医が休止要請施設の対象外として選ばれたことに対しては、受動的な意見ではありますがとても嬉しかったというのが正直なところですが、その間に、どういう形で自分たちが社会にアピールしていくかという点において迷いがあり、社会から要望されている職業であることを十分にアピールしきれなかったという気がしています。私自身は現役から退いていますので、周囲の獣医の方々のやっていることに対して静観していただけており、決して偉そうなことは言えません。ただ、社会が必要とってくれたにもかかわらず、獣医の方たちがそれを自覚していなかったように感じたところが正直あります。このことに関して、皆さんのご意見を伺えればと思います。

西村：私も A さんの意見に近く、獣医師側からの発信がかなり少なかったように思います。海外の獣医師会は活発に情報の発信をしていましたが、残念ながら日本の獣医師会からはほとんどありませんでした。事務局が閉鎖します、というお知らせが来ましたが、それ以降ぶっつり何もない、といった状況でしたね。

B さん：私は動物病院の獣医師はエッセンシャルワーカーである、と考えます。なぜなら、犬を飼っている方の多くは、犬は家族の一員であり、自分の命と同じくらい大切だと考えているからです。コロナとは直接関係ないですが、大きな災害が起きたときなどには難しいながらも同行避難を望むなど、それが顕著にあらわれてきます。ですから、獣医は社会的に重要な仕事をしていて、エッセンシャルワーカーであると考えていいのではないかと思います。

C さん：動物製薬会社に勤めています獣医師です。お二人の先生のおっしゃる通りだと思います。こういう時期なので、動物病院で診療を続けていくには感染対策だけでなく、いろいろなご配慮が必要だと思います。たとえば今回のコロナの場合は人と動物との間での感染もあるかどうかと言われていて、そこにも飼い主さんの不安があり、そ

のようなことについてもアドバイスをしていく必要があったのではないかと思います。弊社はグローバル企業なので、海外の獣医師に対してアンケートをとってみましたところ、ほとんどの獣医師が飼い主さんのコロナ問題への不安について相談に乗っていたという結果でした。診療スタイルも変わってきていて、リモートでの診療を始めていたり、薬を宅配便で送ったり、動物病院の入場制限をしたりなど、細かい工夫をしながら診療を続けているのがアンケート調査からわかってきています。そのような努力には心から敬意を表したいと思っています。

D さん：まず、獣医が社会的に必要な仕事かどうかですが、間違いなく必要な仕事であると確信しています。ペットの命に関わるだけでなく、公衆衛生や食品安全などの役割を担う獣医師の方や獣医療関係の方の必要性は間違いなくあります。また、4月5月に一般の飼い主さんを対象にアンケートをとりましたところ、自分が感染したときに自分のペットはどうなるのか、人からペットに感染するのか、ペットから人に感染する可能性はあるのか、というように不安に思っている方が多い状況であるのがわかりました。先ほど西村先生がおっしゃっていましたが、あまりにも獣医師側からの発信が少なかったように感じましたので、その点は残念に思ったところです。

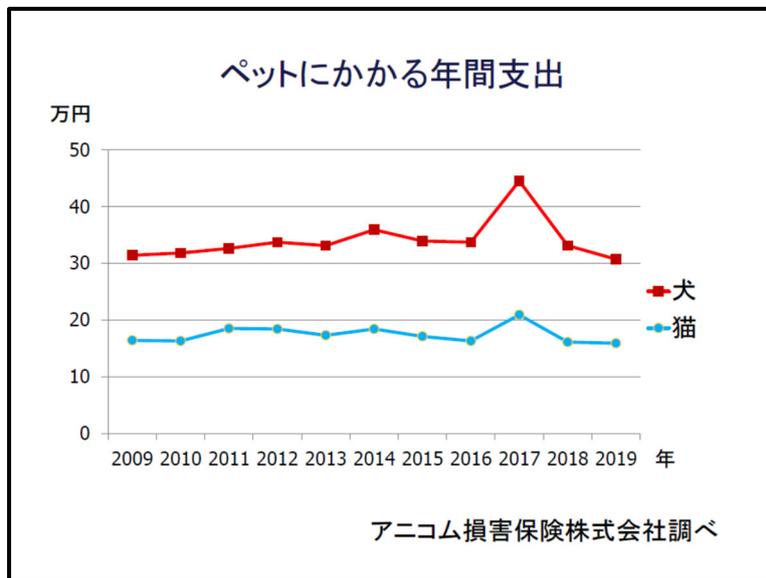
西村：エッセンシャルワーカーかどうか、というところでは獣医はエッセンシャルワーカーなのでしょうが、エッセンシャルワーカーなりの責任というのもあるのではないかなと思ったこの数ヶ月でした。それでは次の話題に進みたいと思います。

【テーマ2：貧乏人はペットを飼っちゃダメなの？】

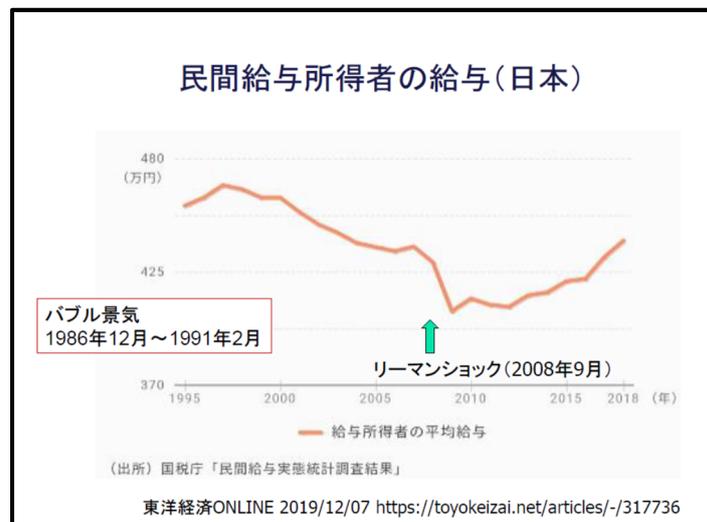
項目	犬			猫		
	2018年 (修正済)	2019年	前年比 (%)	2018年 (修正済)	2019年	前年比 (%)
病気やケガの治療費	56,691	44,869	79%	29,631	23,919	81%
フード・おやつ	57,049	52,497	92%	42,925	49,713	116%
サプリメント	11,311	8,737	77%	4,694	2,783	59%
しつけ・トレーニング料	6,446	7,273	113%	22	2	9%
シャンプー・カット・トリミング料	44,508	42,323	95%	3,002	2,623	87%
ペット保険料	48,153	50,155	104%	30,653	30,155	98%
ワクチン・健康診断等の予防費	30,250	27,653	91%	12,424	12,814	103%
ペットホテル・ペットシッター	7,743	8,339	108%	3,563	3,469	97%
日用品	13,339	20,601	154%	13,113	12,118	92%
洋服	11,105	13,156	118%	408	753	184%
ドッグランなど遊べる施設	3,795	4,157	110%	0	6	-
首輪・リード	5,112	5,387	105%	1,929	2,354	122%
防災用品	602	1,082	180%	633	1,431	226%
交通費	15,998	5,457	34%	2,057	1,357	66%
光熱費 (飼育に伴う追加分)	19,512	15,113	77%	15,920	15,183	95%
合計 (円)	331,615	306,801	92.5%	160,975	158,680	98.6%
回答数	2,059	4,103	199%	488	1,542	316%
どうぶつの平均年齢	6.0歳	5.2歳	85%	4.9歳	4.8歳	100%

有効回答数
6,111 (2019)
2,668 (2018)

アニコム損害保険株式会社調べ https://www.anicom-sompo.co.jp/news/2019/news_0200331.html



西村: つぎに皆さんにお聞きしたいのは「貧乏人はペットを飼っちゃダメなのか」ということです。最近、お金も持っていないのに犬なんか飼うなよ、という風潮が強いように感じています。毎年、アニコムさんがペットの飼育にはいくらぐらいお金かかるのかを調べてデータを公開しています。2019年のものでは、犬の年間支出が30万円くらい猫が16万円くらいとなっています。2009年から10年間の推移をみても、犬で30万円ちょっと、猫で16万〜17万円という感じです。大型犬になると少し高くなって40万円くらいかかるようです。結構なお金がかかります。



国税庁が出している民間給与所得者の給与水準についてのデータでは、1998年ぐらいがピークでその後徐々に下がっていき、2008年9月のリーマンショックで大きく下がって、それからはじわじわと上がってきていました。とはいえまだ1998年のレベルには達していない状況です。1990年代後半と比べると、結構貧乏になっているということです。また、2008年から給料は少しずつ上がっているのに、犬の頭数は2008年をピークにその後ずっと減ってきています。

西村：私たちの動物病院でも、手術して 50 万円というのは当たり前で、ICU に入ると 100 万円近くにもなります。

決して珍しい話ではありません。毎回請求をしながら、自分の犬や猫の治療に 100 万円必要となると無理だろうな…と感じています。

E さん：高度医療というのも難しいなと感じています。すでに家族になっている子には高額な治療費でも頑張って出される方もいるのですが、じゃあ次の子を迎えるか、という決してそうではありません。一般診療に携わっていたときには、治療費が高くて諦めた飼い主の方が、次の子を迎えてまた来院されていたということもありましたけれど。

西村先生：医療に限らず他のことにもかなりお金がかかるようになってきているのは間違いありません。

E さん：純血種の場合は飼い始めのときにお金がかかるのも結構大きいのではないかと思います。拾った猫を飼うならそこまでお金をかけなくてもいい、というような風潮がこれまではあったのではないかと思います。

F さん：法的な面から見ると、個人的には生活のレベルに合わせて相応に飼うということで良いと思います。しかし、国には生活できない方に対する生活保護の制度があり、その生活保護を受けている方がペットを飼えるのか、という問題があります。仮に飼っているとすると、餌代や治療費は国の税金から出ていくことになるわけです。ほとんどの場合、生活保護の方はペットを飼えないのですが、ごく一部例外的に飼うことが許されている場合があります。ですから国としては、貧乏だから絶対に飼ってはダメという判断をしているわけではないのかな、ということです。もう一つ、動物愛護管理法の 44 条に動物虐待罪というものがあります。その罰則は「1 年以下の懲役、もしくは 100 万円以下の罰金」で、その中に怪我をして治療が必要なのに治療しないのは虐待にあたる、と書かれています。飼っている動物が怪我や病気で治療が必要なのに動物病院に連れて行かなかった場合、犯罪として成立してしまうのかなと、そういう疑問を日頃から持っています。

西村：動物を飼うことに対して社会がどうバックアップするか、というところも重要な点に思います。たとえばタイの大学動物病院では低所得の人に向けて無料で診療をしています。お金がなくてもペットが飼える、医療を受けさせられるのです。イギリスにも低所得者用の動物病院があり、そこでは高度な医療は受けられませんが最低限の医療は受けられるというバックアップシステムがあります。このような、社会が動物を飼うことをどう考えるのかというのも一つの尺度だと思いますし、それをどこまで追い求めるのかという側面もあると思います。

G さん：私は人間の医療関係と動物取扱業の仕事をしています。実際に私自身が関わっている方のなかに、生活保護を受けるまでのギリギリの生活で犬を飼育している方がいました。亡くなったご主人が大切にしていた犬だったの

ですが、狂犬病の予防接種代やワクチン代もまったく払えず、全身にノミがついてもお金がなくて駆除できないような状態で7年間飼育していました。最終的には保護団体に渡したのですが、そこで問題になったのが医療費を支払えない状況で飼っていたことでした。今、高齢化によりペットを飼う高齢者が増えていて、年金の中からはどうしても医療費を捻出できないということが大きな問題となっています。結局どうすることもできず、飼育が続けられないという状況が起きていますので、地域社会や獣医療従事者も含めてどのように対応していったらいいのかを考える必要があると思います。

西村：ケアマネさんの話などを聞くと、超高齢化社会もあってそういった問題がかなり続出しているようですね。日本が豊かだった頃はまだ受け止めることもできたでしょうが、これだけ貧乏になってくると、いろいろな問題が噴出してくるような気がしています。

H さん：普段は広告関係の仕事をしており、動物業界は副業でやっています。このテーマは非常に興味を持っていることで、個人的にはお金を持っていない人でもペットを飼っても良いのではないかと考えています。ですが、社会的な風潮としてはお金をかけてペットを飼うのが当たり前になっているという印象があります。ペットをモノではなく一つの命として大切に扱う方々が増えていて、それに伴い動物にお金をかけようとする方も増加している流れになっているので、その流れには逆らえないところがあるのではないかと。ですから、所得の低い人がペットを飼えるかどうかは、先ほど西村先生がおっしゃっていたように、社会的な寛容度がどのくらい備わるかによってくるのではないかと考えています。

西村：所得が高い人と低い人はきっぱり二つに分かれるわけではなく、当然ですがグラデーションになっていますので、考え方によってどこまでを認めるかのポイントが変わってくるところがあると思います。一つの方向性として、日本では犬を飼う場合、所得はいくら以上でないとダメというような話も出てくるかもしれません。その一方で、色々な税金を削って社会的なバックアップに投資しようという話が出てくるかもしれません。今後どうなるのか興味があるところです。所得がドカンと下がることだけは確実に間違いないと思いますので、まずはそこにどう備えていくかが話題になってくるのではないかと思います。

Iさん：動物製薬会社に勤めております。私は動物が好きなので、大切にできる方に飼っていただきたいと思っています。先ほどからお話しにありますように、医療も含めてペットの飼育にはかなりのお金がかかるので、人間の子どもと一緒に育てるのですが、この子一人育てるのにどのくらいお金が必要なのかということを考えると、なかなか飼えるものではないとなってしまう方も多いのではないかと思います。ただし、好きだったら何でも適当に飼って

いいと短絡的に考えてはならないと思いますので、やはり、飼う前には費用を試算して、ご自身やご家庭に合う動物の種類をしっかりと検討しておくことが必要だと思います。

Jさん: 今まで発言された方の意見にほぼ同意ですが、社会のシステムとして低所得者が動物を飼うための仕組みが今後どれくらい作られていくのか、というところが気になっています。今14歳の私の犬は、これまでまったく病気らしい病気をしたことがなかったのですが、14歳になって突然大きな病気をしまして、正直言って結構な額の医療費がかかりました。それでも、知り合いの先生から紹介していただいたこともあり、最善の医療をおそらくリーズナブルに受けることができたので良かったと思っています。その一方で、最近の動物病院ではあれこれプラスして色々なものをかぶせてくる先生も多くなっているのかなという感じがしています。逆に、ある程度ご年配の獣医さんですと、犬なのだからこんなこともあるよ、という感じで最低限の治療をしてくれる先生もいらっしゃいます。意外とどちらも結果はそう変わらなかったりするものです。

海外ではスペイクリニックのように、低所得者の方が最低限の獣医療を受けられる仕組みがある地域もあります。それぞれの社会がそれぞれの仕組みをつくっているんで、それらがすべて良いものかどうかは分かりませんが、所得が減っても動物を飼う人は多分そう減らないのではないかと気がしています。色々な飼い方ができるのと思うからです。医療費だけでなくペットを一生飼いきるためにかかる費用は、社会の仕組みや獣医さんの考え方、フードの選び方などでかなり変わってきますので。実はペットサロンも今回のコロナで需要が減らなかった業種の一つです。やはり、このような時期であっても飼い主さんはペットを綺麗にしたい、健康を守るためにケアをしたい、という意識が強いようです。エッセンシャルワーカーまではいかないとは思いますが、ペットサロン業界も似たような立場にいるのかと思っています。所得が低くなってもペットを飼えるような仕組みは、業界全体で考えて、仕組みづくりを行っていく流れになるのではないかと考えています。

西村: 先ほど社会が支えるシステムの話をしましたけど、日本は超高齢者社会になっていて、平均寿命は延びています。それでいっぱい、社会保障でいっぱいになるのが目に見えていますので、動物に向けて税金が投入されるのは、現実的にはなかなか難しいだろうと思います。ですが、それを支えるシステムは具体的にはどういったものがあるのか、という興味があります。

もう一つ、アメリカやヨーロッパ、オーストラリアなどの海外でペットを安楽死にする大きな理由の一つに“医療費が払えない”ということがあります。その理由は正当で倫理的である、ということで安楽死の判断をしているのですが、そのような考えが日本でも生まれてくるものでしょうか。日本だとそのように考える人はかなり少ないので

はないかと…。動物病院に連れて行かないという選択肢はあるかもしれませんが、そこで安楽死の選択をすることはまだまだ少ないように思います。

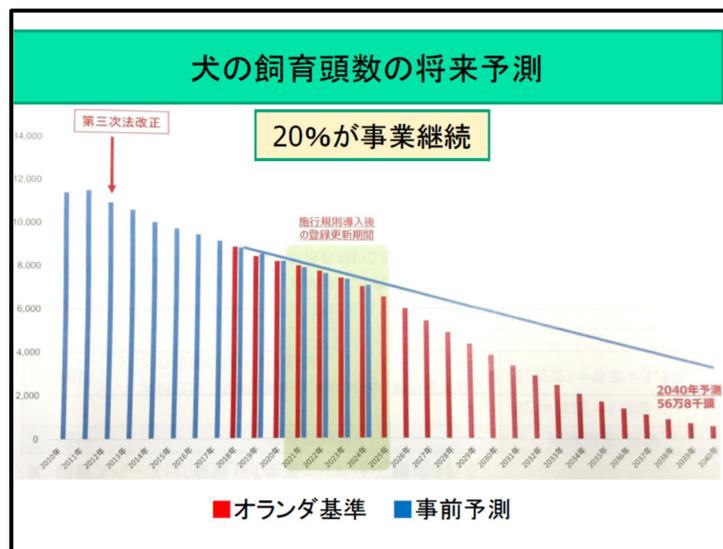
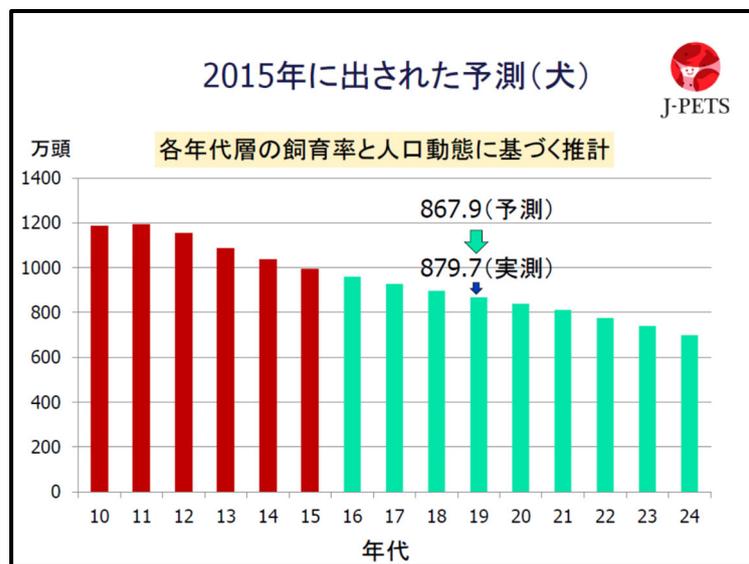
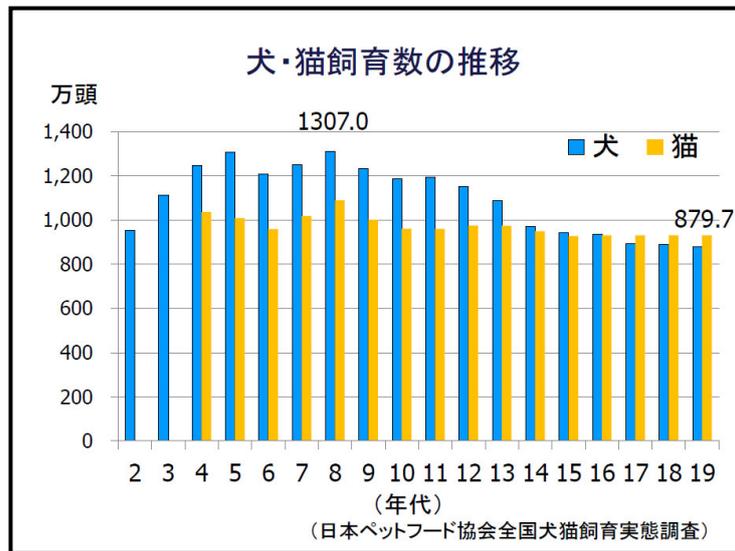
Kさん：私が学生の頃にはスポーツをするのにお金がかかるか、という話がありました。そのとき、お金のない人はスポーツをやるなという声もあったのですが、言い方には気をつける必要があると思っています。スポーツをするのも動物を飼うのも本人の自由なわけですが、動物を飼うにはどうしても費用がかかります。そのため、これから先に今まで私たちが経験したことないような所得の落ち込みがあった場合、闇の部分が見えてくるのではないかと思っています。西村先生がおっしゃっていたように、安楽死は欧米では一般的でも日本人にはなかなか馴染みがありませんので、今まで通りに保健所で、でもそれは表沙汰にならないように、という形で起きてくるのではないかと大変懸念しています。獣医療の現場においては、この人はお金がある、ない、を見極めて、無理に高度医療を紹介したりせずに、ではこのようしましょうと言えるような付き合い方があっても良いのではないかと考えています。そしてそのときに、処分するのではなくどうにかして譲渡できないか？というようなアドバイスができたらと。今後闇の部分が出てきたとき、それをどう乗り越えていくか考えてやっていきたいと思っています。

西村：おっしゃる通りで、そういった部分はどうしても出てくるでしょう。私達も恐れている部分であり、これから現実的に直面しそうな問題だと思います。ですので、今から色々なことを想定し、ディスカッションをして、ある程度社会的な合意を目指しておいた方が良いのではないかなと思っています。

【テーマ3：ペット数は持ちなおすのか？】

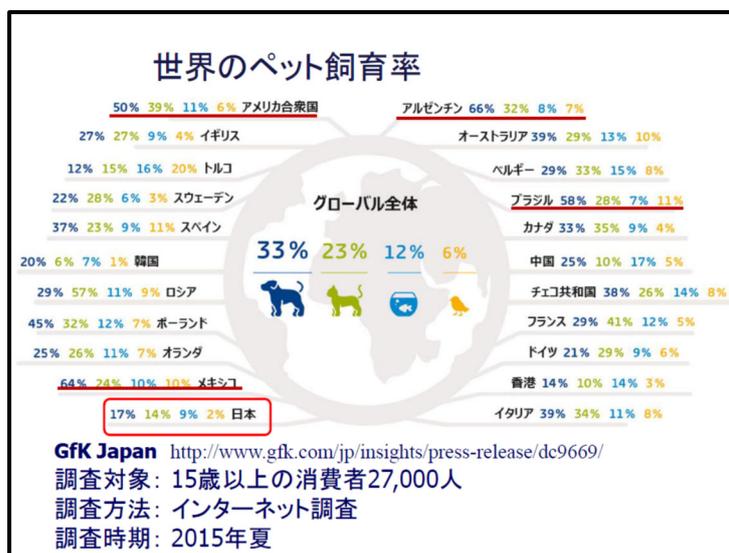
西村：犬や猫の頭数はこのところずっと減っていました。今年は少し持ち直すのではないかとありますが、今後どうなっていくのか、それについてどのように考えているのかをお聞きしたいと思います。

コロナがざわざわした今年2月の中旬以前は、ペットの数は間違いなく危機的な状況にあると言われていました。日本ペットフード協会の調べによるここ20年間の犬猫飼育数のデータでは、2008年にひとつのピークがありました。その年にリーマンショックが起これ、その後少しずつ犬の数は減っていき、2019年にはついに900万頭を切りました。2008年には1,300万頭ほどいましたから、10年ちょっとで400万頭減ったわけです。激減ですね。このデータは頭数を100%把握しているものではないのですが、公的なデータがほかにないのです。



2015年、環境省から今後の犬の飼育頭数がどう推移するかという予測データが出ましたが、そのとき、2019年には8,679,700頭になるだろうと予測されていました。つまり、実測とほぼ同じ数字が出ていたということです。現在の勢いで減り続けると、4年後の2024年には700万頭ぐらいになると予測されています。おそらく、今年2020

年には少し増えると思うのですが、近年の減少傾向は続いていくと思われます。そうすると、2040年には568,000頭まで減るのではないかとことです。法改正も伴ってブリーダーさんが減るとことを軸にした予測なのですが、いずれにしてもかなり減ることです。



年	世帯飼育率 (日本)	
	犬 (%)	猫 (%)
2010	17.83	10.58
2011	17.69	10.31
2012	16.77	10.22
2013	15.04	9.92
2014	14.37	9.76
2015	13.86	9.63
2016	13.56	9.56
2017	12.84	9.71
2018	12.64	9.78
2019	12.55	9.69

日本はこのような状況ですが、では、世界ではペットがどれくらい飼われているのかといいますと、全体的にアメリカ、アルゼンチン、ブラジルはずいぶん飼育率が高いです。犬ではメキシコが64%、アルゼンチン66%、ブラジル58%となっています。ヨーロッパは思ったほど高くはないのですが、それでも犬で30%前後くらいでしょうか。これは2015年のGfK Japanによるインターネット調査によるデータになります。(一般社団) ペットフード協会からさらに細かいデータが出ていますが、それによれば2010年からずっと減っていて、2019年は犬が12%ちょっと、猫が10%弱、といったところです。世界の平均では犬が33%くらいなので日本はそれの3分の1くらい。他のアジアの国に比べてもダントツで日本の飼育率が低いという状況になっています。それに加えて今後経済もど

ほとんど悪くなるだろうという状況なのですが、皆さんはペットの飼育頭数がどうなっていくと考えるか、ご意見をお聞きしたいと思います。

Dさん：コロナの影響で今年は若干頭数が増えるのではという予測がありますが、犬の場合、50歳代、60歳代の方は今飼育している犬が亡くなったら次は飼わないと考えている方が非常に多いです。これまで何度かアンケートを実施しましたが、そのように考えている飼育者の傾向は変わらないと思っています。ですので、全体的な傾向としては犬の頭数というのは残念ながら先ほどの予測に近いのではないかという気がします。猫の方はほぼ横ばいで推移していますが、犬の方は今後も減少し続けると思います。業界としても何らかの対応策をとっていかねばならないと以前からずっと考えていることなのですが。

西村：今後の頭数減少への対策ということではなくて、単純に減るのかどうなのかということと、それをどのように思っているかというところをディスカッションできればと思います。

Bさん：犬の飼育頭数が減るのは間違いないと思います。J-PETSを立ち上げるときに東大の名誉教授に相談したことがあるのですが、日本人が減るのだから犬も減るよ、と。日本の人口が減っていく状況で犬が増えることは現状考えられないでしょう。残念ではありますが。私たちができるのは、いかに減少率を減らすか、減少のスピードを緩やかにするかということなのかと思っています。

Lさん：確かにこのコロナの状況で、すごく増えたというのは聞いています。ペットショップなど生体販売をしているところではかなりの高額で売れることが増えていて、急激な増加が見込めているようです。ただ、トリミングサロンの方とお話をしたり、今までとあまり変わらない感じで仕事をしている立場としては、この先がなかなか読みづらいというのがあります。コロナになる前の時点では、先ほどのDさんのお話にありましたように高齢者の方はもう次は飼わないというような話がよくありましたので、やはり状況としてはよくないのだろうと感じています。

トリミングサロンのほかにもペットホテルや犬の幼稚園もやっているのですが、一頭にかかる費用が上がってきていて、ちょうど今ピークになっています。そのタイミングでこのコロナの状況になったので、今後その費用がどのように使われるようになるのか関心があります。また、来年の6月1日施行の法律に数値規制が入ったら、譲渡団体やブリーダーさんなどから一気に犬と猫が溢れる可能性があるのも、その時点で獣医療などの金銭的な問題が一気に噴き出してくるのではないかと考えています。ですからそれまでに、今の適正な価格をどのようにしてお客さまに容認していただくか、もしくは獣医療や他のサービスに高額なお金をかけなくても飼い続けられるということとをどのようにお伝えできるかが私の中でのテーマになっています。

O さん：仕事では病院の血液腫瘍科にファシリティドッグという犬を常勤させる仕事をしています。過去に関わったご家族から、ファシリティドッグのベイリーやアニーなどをきっかけに犬を飼い始めました、という話を聞くことが多々ありますので、飼い始めるには最初のきっかけがすごく大事なのではないかと感じます。子どもが入院していて経済的にもかなり大変になっている中で、その後に犬を、しかも皆さん大型犬のゴールデンを飼われているのです。そのようなことが、何かこれからのヒントになるのではないかと感じます。

西村：O さんはシャイン・オン・キッズで働いていらっしゃるのですが、この前クラウドファンディングを達成されていましたよね。

O さん：ありがとうございます。おかげさまで達成できました。クラウドファンディングはオンラインでどうやって子どもたちの支援を継続するか、という企画でしたが、私たちが犬を導入している 3 つの病院いずれにおいても、このコロナの中で一度も中止することなく現場での活動を継続できています。4 月に西村先生から緊急体制をどう整えればいいのかについてのご助言をいただき準備を進めることができましたし、ハンドラーが看護師として病院の ICT と感染対策室と調整をしながら継続することができました。しかし、いつかロックダウンなどで現場での活動が継続できなくなったときでも子どもへの支援を継続するのはとても大切なので、他の方法を作っておこうということで始まったのがオンラインの企画です。並行して続けられる限り現場の活動は続けますが、もし院内クラスターが発生してしまったら止めなければならなくなってしまいますので、そのバックアップとして行っているという面もあります。

西村：シャイン・オン・キッズの活動などぜひご覧になってください。ビデオを見ると泣きますよね。ぜひ泣いていただければと思います。クラウドファンディングにもご協力をよろしくお願いします。ほかに何か日本のペットの数はどうなるのだろうと思っていることがありましたら、皆さんご意見いただけませんか。

C さん：飼育頭数が減っていても、実は動物医療費は上がっています。昨今、高度医療もありますが、一般診療においても薬代はそれなりの価格です。我々はグローバル企業なのでいろいろな国で同じ薬を販売していますが、国によって全然値段が違います。びっくりするくらい違うこともあります。具体的には申し上げられないのですが、たとえばアジア地域において比較すると、インドネシアで販売している金額とベトナムで販売している金額、そして東京で販売している金額はかなり違ってきます。それはさておき、飼育頭数がこんなに減ってはいるのですがアンメットニーズもあり動物医療費は上がっているため、必要なお薬を出していけば我々の業としては成り立っていくという経済的な側面があります。社会から必要とされているものを提供していることは、社会貢献にもなっている

と思っています。

医療費が出せなくて7年間もノミをつけたまま犬を飼っていたというお話がありましたが、それは動物の健康にも、人の健康にも良くないことです。ノミやダニのように基本的に動物に寄生するものに対する薬が市場的には1番大きいのですが、それについては競争率が高く、値段はどんどん下がっていくのではないかなと思います。ワクチンも同様です。それよりも、加齢によって出てくる新たな病気や、動物医療として治療が難しいもの、あるいは人の薬を無理して使っているものなどに対して我々が薬を提供していくことが、会社を継続していくために必要ではないかと思っています。

とは言え飼育動物の頭数が増えていくのは大事なことなので、私どももここに参加させていただいていますが、最も大切なのはペットと共に暮らすことによって皆さんが得られる幸せです。それに対して微力ながら応援していくようなことを企業としてやっていければと考えていますし、個人としてもやってきたいと思っています。ペットの数を無理矢理増やしたいというのではなく、ペットとの生活が幸せで心を満たすものであれば、その数は自然に増えていくのではないかと信じております。

【テーマ4：その犬安楽死しますか？】

西村：では次のテーマ、「その犬安楽死しますか？」という話題に行きたいと思います。こういう状況で犬を安楽死すること、またはしないことは倫理的に正当かどうかを東大生188人に質問してみました。東大生はこういうところで役に立つといますか、意外と社会の情勢を反映することを言います。ですから一つの参考になるのではないかと思うのです。

東大生には次の6つの質問をして、倫理的にどう考えるか、正当かどうかをたずねました。

- ① 排尿困難と腰部の激痛を主訴に、13歳齢のシェルティーが来院した。検査を行うと進行した前立腺癌があり、腰椎と骨盤に転移していることが分かった。効果的な治療方法もない。飼い主は、13年間一緒に生活してきたこの犬を家族としてとても大切に考えている。しかし、痛がる姿を見ているのがあまりにつらいので安楽死してほしいと言う。この犬を安楽死させることは倫理的に正当か？
- ② 老夫婦が重度の破行と痛みを示す10歳齢のラブラドル・レトリバーを連れて来院。検査を行うと右前肢に骨肉腫があることが分かった。最終的には治療しても肺転移して亡くなってしまう場合が多いものの、現段階では肺などへの転移は認められておらず、断脚手術と化学療法で1年以上の生存期間が期待できる。しか

し、飼い主は年金生活でとてもその治療費は出せない。見ているととても痛そうであまりにつらいので安楽死させて欲しいと申し出た。この犬を安楽死することは倫理的に正当か？

- ③ 8歳齢になるコッカー・スパニエルがリンパ腫にかかっており、9ヶ月前から化学療法を受けている。当初は治療によく反応したが、現在では反応がほとんどなくなり、犬は痩せて衰弱してきた。リンパ腫は再発率が高く、再発すると治療がだんだんうまくいなくなるパターンの多い病気。特にこの3日間はほとんど何も食べない。獣医師としてはこれ以上の治療法もなく、今後どんどん弱って苦しむことはほぼ間違いないため安楽死を勧めたところ、飼い主は怒り治療を続けないなら別の獣医師のところ連れて行くと言っている。この状況で獣医師が治療を続けることは倫理的か？
- ④ 大型犬が飼い主および飼い主の家族を咬むので、安楽死してほしいと依頼してきた。訓練をしても咬むのはおさまらず、飼い主は何度も咬まれて病院に行っている。この依頼を受けることは倫理的に正当か？
- ⑤ ミニチュア・ダックスフントのブリーダーが、6週齢の子犬を持ち込み、顎の奇形があり売り物にならないので処分してほしいと依頼してきた。この動物を安楽死することは倫理的に正当か？（法的にできるかどうかという問題は含めないで考えてください）
- ⑥ 一人の女性が、5歳齢のビーグルを連れて病院を訪れ、犬を安楽死してほしいと言う。事情を聞くと、近々結婚する予定だが、結婚する相手が動物嫌いがかつ引っ越し予定のマンションが動物飼育禁止であることが分かった。飼い主に、その犬をほかの人に引き取ってもらうように話したが、やんちゃな犬なので誰も引き取ってくれないと拒否された。その犬を安楽死させることは倫理的に正当か？

これらの質問をした結果、1番目の質問については188人中172人が安楽死するのが正当であると答えています。2番目の年金生活のケースは188人中127人と、3分の2が正当であると答えています。3番目は110人、3分の2弱が治療を続けることが正当と答えています。4番目の咬む犬の安楽死は9人だけが倫理的に正当と答えています。5%ぐらいでしょうか。5番目の奇形の子犬の安楽死に関しては正当であると答えているのは7人、つまりほとんどが倫理的に正当ではないと答えています。最後の結婚するために安楽死をという話では、正当だと答えたのは2人で、ほぼ全員が正当ではないと答えているということになります。

具体的な数字を出したのは今年が初めてですが、毎年だいたい似たような傾向です。皆さんはこれらのことについてどう考えるかお聞きしたいと思います。安楽死に関しては考え方のバリエーションが本当に広いですし、答え

にくいところがあると思いますが、どんな意見でもいいのでいかがでしょうか。

A さん：安楽死を勧めたのに飼い主が怒ったというところで、それは多分獣医師と飼い主との間に信頼関係がほぼ築けていないためではないかと思いました。その獣医師の倫理観と飼い主の倫理観がまったくかみ合っていないことが問題ではないかと。問題を聞いてそれを最初に感じました。もしも私が同じ立場で飼い主さんと真剣に話し合ってきたとすれば、怒って断られることはないと思うのです。ですから、そのような状況のときには飼い主さん全員が納得してくれた上で、安楽死を行う形で治療を続行することはないと考えます。そしてもし、そのようなケースで飼い主さんからの怒りを受けたときには、申し訳ないけれども自分としては治療を続けることはできないと答えると思います。あくまでもこれは私自身の感覚と考え方ですので、皆さんのご意見も広く伺えればと思います。

B さん：まず、私は安楽死の提案はしますが、安楽死をしましょうと言ったことはありません。昨日も行いましたが、動物を診療している立場から、いかに動物を見送ってあげるかを常に考え、提案をすることがあります。しかし、獣医師が飼い主さんに対して勧めるべきではないと考えます。3番目の問題については、ご家族全員が安楽死を望まれるなら実施するケースだと思います。

西村：3番目の場合、飼い主さんは安楽死を絶対しない、治療の継続を望むと言っているわけですから、治療を続けるかについてはどのようにお考えでしょうか。

B さん：前提として他の治療方法がないという話でしたよね。まずは飼い主さんとしっかり話をして、その上で積極的な治療はやらないと思います。

西村：最低限の治療を続ける、ということになりますね。これは獣医師側の問題になってくるのでしょうか。

E さん：ご家族が望んでいないのに安楽死をすることはできないので、安楽死を希望されていないのであれば、いかに動物を楽にしてあげるかという対処療法といいますか、獣医師はそれをするしかないと思います。

西村：治療を続けることは結果的に苦痛を長引かせることになってしまいますが、そういう前提でも治療を続ける、ということよろしいですか。

E さん：それを含めご家族にどういう状況であるかをお話して、それでも命をつないで欲しいという選択をされるのであれば、獣医師はその意見を受け入れざるを得ないのではないかと思います。ご家族にいかに状況を理解していただくか次第になるのではないかと思います。いずれにせよ決定権はご家族にあると思いますので、そこはご家族の価値観というか死生観というか、それに対して獣医師がどう向き合うかになってくると思います。

西村：日本的に考えると、おそらく多くの獣医さんが渋々、渋々かどうかはわかりませんが、治療を続けるという

選択を最終的にする人が多いのではないかという気はしますけれども。

Cさん:別の問題になりますが、チャットを見ていますと獣医療分野において緩和ケアはどのくらい認知されていて、普及していますか、という質問があります。どなたかお答えいただけませんかでしょうか。

西村:緩和ケアについては、痛みのコントロールという点で日本では割とやっていると思いますし、関心が持たれている領域だと思います。ですが、リンパ腫の場合ですと治療がうまくいくかどうか大きいので、病気によっては緩和ケア、痛みのケアということにならないため、より難しくなると思います。実はこの腫瘍患者さんの痛みのケアなのですが、動物の場合、日本以外ではほとんど研究がありません。少なくとも論文としてほとんど出てこない状況です。つまり、海外ではそういう緩和ケアは間違っているという認識が一般的であるということでしょう。

Oさん:私がこの緩和ケアの質問をチャットに書かせていただいたのですが、小児がん支援団体職員として疑問に思うことがありましたので、追加でお聞きしてもよろしいでしょうか。獣医療の中で専門医の獣医師の方が増えていくと思いますが、緩和ケアの専門医制度もあるのでしょうか。漢方系の得意な獣医師がいるというのも伺ったことがあるのですが、そういった方が動物の痛みのケアに関わっておられるのでしょうか。そこには行動カウンセリングの先生も関わっているのですか。

西村:日本において、ということですよ。どうなのでしょう、一般の獣医師の先生が痛みをコントロールすることはできると思いますし、痛みをコントロールしようという動きはもちろんあると思います。しかし、先ほどお話ししましたが、緩和ケアの専門医という発想自体がアメリカやヨーロッパにはないようですので、学問としては発展しないのではないかと思います。

Oさん:それはどうしてなのでしょう。

西村:簡単に言えば、日本では安楽死をなかなかしないからですね。となると、とても痛がっている動物がいるけれど、どうする？という状況に直面します。海外ですと、目の前に痛がっている動物が存在している、ということ自体があり得ないのです。そのため、痛みをコントロールしようという発想がない、つまり、緩和ケア的な発想があまり出てこないということがあります。

Oさん:よく分かりました。ありがとうございました。

Cさん:緩和ケアというのは、おそらく人間の方もそうだと思うのですが、看護師の役割が大きいのではないかと思います。日本でようやく動物看護師が国家資格になりそうということですので、その国家資格を持った動物看護師の活躍の場を広げるという意味でも、もしかしたら日本で緩和ケアは発展していくのかなとも思いました。もち

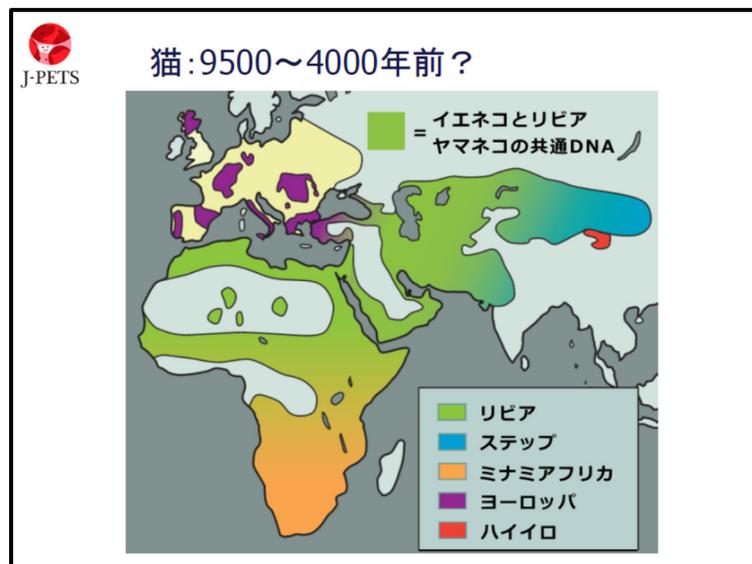
ろん費用の問題がついてきますので、総合的に考えるとどちらの方向に行くのか見えないところもありますけれど。

西村：愛玩動物看護師法が成立し、ちょうど今内容を詰めている最中です。来週明後日に第1回目の会議が開かれますが、動物看護師に活躍してもらうのは日本の獣医療の発展の上でも必須です。活躍してもらえる体制をいかにして作るかという議論が、まさに始まったところではあります。

話を戻しますが、実は、これらのケースはアメリカで書かれた獣医倫理学の教科書に載っていたものをモディファイしたものです。その教科書には答えまで載っていて、“これらのケースで治療を続ける獣医師は甚だ倫理観に欠けておりいかがわしい”と書かれています。アメリカ、そしてヨーロッパやオーストラリアでの考え方ですね。ただしイギリスの人に聞いてみると、このケースでそのまま動物を返してしまうと獣医師免許が停止になると言っていました。そこまでやるのだ、とも思いましたけれど。欧米の倫理観を真似しろというのではなく、やはり国によって動物に対する考え方がかなり違うと言えると思います。では、猫の問題に進みたいと思います。

【テーマ5：猫は室内で飼わないといけないの？】

西村：今、獣医さんのほとんどが猫を完全室内飼いにしなさいと言うと思います。そして、猫を飼うならば完全室内飼いで、という方も多いと思います。猫は本当に室内で飼わないといけないのでしょうか？



猫は、皆さんご存知のように、リビアヤマネコを祖先としています。これまで4000~5000年くらい前に誕生したと言われていましたが、どうやら一番古いのは9500年ほど前のようです。犬ほどではありませんが猫もかなり歴史が古いのは間違いありません。

ツレないネコに惹かれるワケ
—進化と対ヒト社会的認知能力からの考察—

講師 齋藤 慈子先生
(上智大学 総合人間科学部)

- 見た目がかわいい: 大きな目と耳、小さな口元(幼体の特徴)
- 人の行動に左右されず、自分の思うままに生きている: 完全に家畜化されていない
- 祖先のリビアヤマネコが人を怖がらず親和的な行動をする特性を持つ
- 人との共通点がある: 体形の変化、顔の前に眼がある、真似して教育する、遊ぶ



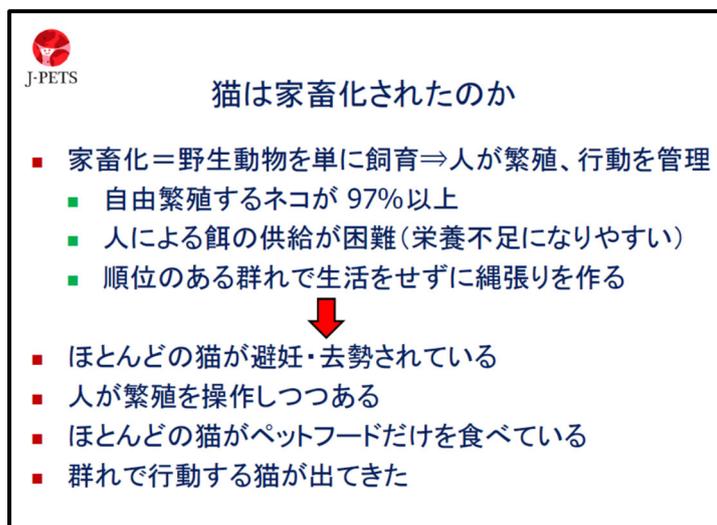
なぜ猫がペットみたいになっていったのかというところですが、以前、最近上智大に移られた齋藤慈子先生に“なぜ人は猫に惹かれるのか”についてお話していただいたことがあります。犬は人との絆がキーワードになってきますが、猫は何ととっても可愛い、見た目が可愛いんです。なぜ可愛いかというと、目が大きくて耳が大きくて口元が小さい。これは人の子ども、赤ちゃんの特徴でもあり、猫もその特徴を持っていることが一つにあります。そしてもともとリビアヤマネコは人間にフレンドリーな猫で、動物園で人が近づくと寄ってくるらしいです。リビアヤマネコが日本にいないか調べてみましたが、残念ながら国内の動物園にはいないようです。それからもう一つ、人との大きな共通点があります。目が顔の前にある、真似して教育をする、という点です。真似して教育をする動物は人と猫と、あともう一種くらいのもので、猿も犬もしません。子猫たちは見て真似をしますが親猫は教育することはありません。また、猫は人の行動に左右されず、自分の思うままに生きている。そこに惹かれる、というのもよく聞く意見です。つまりそれは完全には家畜化されていないということですね。



この写真の猫は谷中の「ねんねこ屋」というところの猫なのですが、たいがい家の周りをうろうろしていて、よく電柱で爪とぎをしています。文京区の電柱は爪とぎが巻いてあって、猫が爪とぎをしやすいようにしてあります。実際は貼り紙を防止するためのものなのですが、猫がカリカリするのにちょうどいいらしいのです。こんなふうに、猫は本当に気ままに生きているという感じです。その一方で今求められているのは“猫を完全に外に出すな”ということです。



よく言われる「動物の5つの自由」ですが、そこでは、①飢えや渇きからの自由、②不快からの自由、③痛み・負傷・病気からの自由、④本来の行動がとれる自由、⑤恐怖・抑圧からの自由が掲げられています。これら5つの自由が動物にとって大切だとされていますが、その中にある“本来の行動”、猫の本来の行動とは何なのかなと思うのです。ご飯は家で食べて、そこで寝て、気ままに外でうろうろして、というのが本来の家猫の行動なのではないのかと。とすると、完全室内飼育はファイブフリーダムのひとつを抑制する、ということにもなるのではないかと思うわけです。



猫が家畜化されているかどうかに関しては、20年ぐらい前までは家畜化の定義に当てはまっていない部分が多

くありました。家畜化というのは野生動物を単に飼育して、人が繁殖や行動をコントロールしていくことです。野犬の例外はありますが、犬は基本的に人が繁殖をコントロールしていますし、家の中で暮らし、散歩に行くときはリードをつけて行動を管理しています。一方猫は、20年ぐらい前まで自由繁殖する猫が97%以上で、そこで生まれた子猫を拾って飼うというパターンがほとんどでした。また、キャットフードが出てくるまでは“ねこまんま”を食べていましたが、それではタンパク質が全然足りなかったため、家でも食べるけれど外に行くとネズミを食べないと栄養不足になってしまうという側面もありました。



外では野良猫や地域猫それぞれに縄張りがあり、縄張りを犯すことはご法度です。毎日猫を観察していますが、多少接触はあるものの大体いる場所は決まっています。基本的に猫は単独で行動するのですが、このごろ群れで行動する猫も出てきて、必ずしも単独行動というわけではなくなってきました。今は猫をペットショップから入手する人もずいぶん増え、繁殖も人が操作しつつあります。キャットフードも出てきたので、それだけを食べていれば栄養的に良いという状況もあります。これらの変化はこの20~30年で起きたものです。猫の歴史が9500年なら、ほんのわずかな期間での急激な変化になります。

猫は犬のように人にぴったりというわけではなく、けれど、人のそばでいいところ取りをして共生し、繁栄してきました。そんな猫はこれからどうなっていくのでしょうか。犬のように遺伝子を変化させる方向に行くのか、完全に人間に家畜化される道を選んで室内飼いの方向に行くのか、それとも外をうろうろする本来の行動を残すのか…個人的にもものすごく興味のあることなので、皆さんどう思っているのかお聞きしたいと思います。

Kさん: 先ほど、日本の飼育率が犬は17%で猫は14%というお話がありましたが、そこには外猫の割合が入っていませんでした。猫の14%中に50%もないかもしれませんが、かなりの確率で外猫がいると思います。日本の独特の傾向かもしれませんが、先程のねんねこ屋さんの前の猫などは、他の地域の猫とはすごく違うと思います。御蔵

島や小笠原などの島と都会の猫は違いますし、東京の中だけでも随分違う。もしかしたら小さな違いかもしれませんが、地域によって違う形の進化が起きているのかもしれませんが。そうすると、完全室内かどうかなどとどちらかに振り切って考えるのではなく、それぞれ良いところを取ってそれぞれ別に進化していくのではないかなとも思うのです。外で暮らして外で餌をもらって要領よく生きている猫は消えないと思います。地域猫という言葉がありますが、家で飼えないから、経済的に無理だから、家庭の事情などにより外で飼っている人がいますよね。家の中には入れない、島で野生の状態で捕獲されながらも生きていくなど、はっきりとした環境の違いがありますので、その中で家猫、外猫、地域猫がそれぞれに進化していき、100年後200年後に答えが見つかるのかなとも思います。あまり思いつめずに見ていくのが猫との上手い付き合いではないのかな、という気がします。

西村：環境省の推定では完全な野猫というのは日本にもうほぼいないということです。いわゆる野良猫の方は400万頭ぐらいいるのではと推定されています。あまり根拠ははっきりしないのですが。

Kさん：ジャングル、ヤンバルなどにいる本当に野生の猫は数少ないと思います。

西村：人間との関わりを持って生きていけるのが400万頭ぐらいかと推定しているようです。

Kさん：やはり、それぞれの環境に適応してそれぞれに進化していった欲しいと思います。たとえばイソギンチャクなど、磯の生物がそうです。猫もそのようにして細かく進化していった良いのではないかなと思います。

西村：いろいろな方向性があると思います。もしかしたら何年後には、日本の猫は完全に家の中で飼わないといけなくなるかもしれません。一方で、その辺りで猫がうろうろしている方が良いと考える人もいるでしょうし。

Kさん：それと狂犬病が発生した場合どうなるのだろうというのがあります。

西村：猫は狂犬病、結構危ないですからね。ほかに、猫好きな方はいかがでしょうか。

Eさん：自宅の猫の話で恐縮ですが、犬化している猫を飼っています。二匹いる猫のうち上の子は猫らしいツンデレなのですけれど、下の子が犬化しているのです。元々震災のところから貰ってきた子なのですが、幼少期のトラウマがあるためなのか、自ら家畜化の道を選んだのかどうかは分かりませんが、分離不安があり、かなり私にべったりです。呼べば来ますし、私のいるところをついて回りますし、とにかく片時も離れません。今もずっと私の膝の上に乗っています。猫らしいツンデレさはまったくなくて犬みたいです。昨年子どもが生まれてからは、子どもに対して非常にやきもちを焼くようになり、ある意味可哀想だなと思っています。かなりストレスが溜まっているみたいなので、もう少し人間に依存しないでいられる方が猫としては楽なのではないのかと思っています。

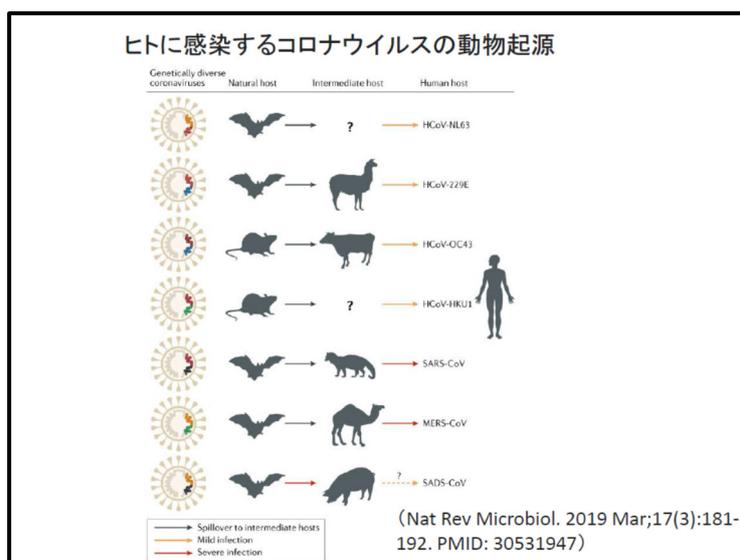
西村：犬もそうですけれど、家猫もやはり進化しています。環境に適応していかに子孫を繁栄させるか、といった遺

伝子を変化させている、猫はそのような選択をしたという可能性はあるように思います。

Iさん: このテーマは個人的に一番悩んでいることで、どう答えようかと考えていたところです。実家で猫を飼っている猫がとてもやんちゃで元気な子で、完全室内飼いをしています。田舎の方に実家があるので外に出してあげたいと最近すごく思っているのですが、猫エイズや白血病などが蔓延しているエリアなのです。第三者的な立場であれば家の外にも自由に出して飼ってあげる方が良いのではないかとは思いますが、飼い主の立場になると、どうしたものなのかと。病気のこともあります、それ以外にもお隣のお庭でトイレをしてクレームになることもあるでしょうし、今すごく悩んでいます。ここで皆さんのご意見をお聞きできればと思っています。

西村: イギリスでは郊外で猫を飼う場合、外に出さないと動物虐待になることもあるようです。先ほど野沢先生がお話しされたように地域によって状況はかなり変わってくるということがあるでしょう。それに合わせ、猫は進化していくのだらうと思います。心配なのは、猫のブリーディングを人間がコントロールしだすことです。猫もブリーダーさんが繁殖し、人々がそれを飼うスタイルになってくると、純血種がどんどん増えてきます。それは犬の歴史で起きたことで、そのために犬は、動物種の中でも極端に病気の多い動物種になってしまいました。色々な系統を作ったことで起きた問題がすべて残ってしまっているの、そういう点では猫もその方向に進むと病気がすごく増えるだらうと思っています。猫種特異的な病気が増える、というようなあたりもどうなのだらうと思うことの一つではあります。

【話題提供：ペットがパンデミックの原因になる可能性は？】



西村: ではこのテーマはこれで終わりにしまして、最後にちょっと話題提供的なところで感染症の話をしたと思います。「ペットがパンデミックの原因になる可能性はあるか？」ということです。新型コロナウイルス感染症について

てですが、猫はかかっていて犬は大丈夫そうな感じかと思いますが、これまでの情報を集めるとペットから人が感染したという証拠は今のところなく、そこが問題になる確率はかなり低そうです。つまり、それでパンデミックが起こる可能性はほとんどないと考えて良いのではないかと考えています。

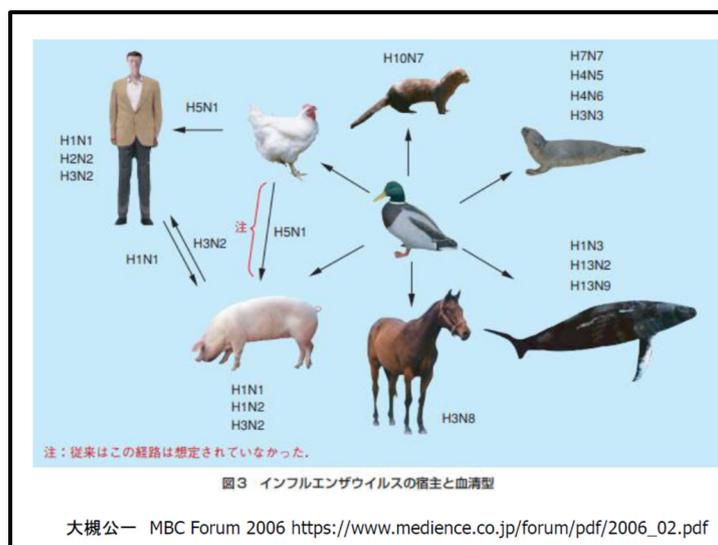
主要なコロナウイルスにおける自然宿主、中間宿主

ウイルス(疾患)	自然宿主	中間宿主	ヒト
SARS-CoV-1 (SARS 2002)	 SARS-like Bat-CoV	 Civet Cat ハクビシン	
MERS-CoV (MERS 2012)	 SARS-like Bat-CoV	 Camel ヒトコブラクダ	
SARS-CoV-2 (COVID 2019)	 Bat-CoV RaTG13	 センザンコウ? Pangolin (could be origin as well [Pangolin-CoV])	

(kakodkar, P. Cureus. 2020 12(4):e7560. DOI 10.7759/cureus.7560)

鳥インフルエンザ

鳥インフルエンザとはトリに対して感染性を示すA型インフルエンザウイルスのヒトへの感染症です。人におけるほとんどの感染者は、感染した家畜やその排泄物、死体、臓器などに濃厚な接触があります。日本では発症した人は確認されていません。



ただしひとつ懸念されるのは人獣共通感染症のウイルスの変異です。ウイルスは自然宿主のコウモリやげっ歯類において、普通は自然宿主からいきなり人が感染することはあまりなく、その間に中間宿主がいます。そこでウイル

スが変異して人にうつりやすくなるのが特徴です。SARS ウイルスはコウモリからハクビシンにうつり、そこから人に来ました。MERS はコウモリからヒトコブラクダが中間宿主となり人に来たというように最近では考えられています。最近のコロナウイルスははっきりしていませんが、コウモリからセンザンコウに行って、そこで人に感染できるようになったと考えられているようです。ウイルスが変異するのは自分たちが繁栄するための戦略をとっているということなので、当然起こりうるのです。

幸い日本ではさほど問題になりませんでした。一時期話題になった鳥インフルエンザ、鳥に強い病原性を示す高病原性鳥インフルエンザは人にうつるとかなり懸念されていました。元々鳥インフルエンザは水鳥が何かにおいて、それが鶏や豚を介して人にうつります。インフルエンザは種類が多く、当然変異も頻繁に起こっています。血清型も色々あり、人にうつるのはH1N1、H2N2、H3N2といったインフルエンザウイルスなのですが、鳥のH5N1（高病原性鳥インフルエンザを引き起こす株）ウイルスが豚を介して人に行くということが起きました。もちろん大量に暴露すれば野生の鳥からいきなりかかる可能性もありますが、そのようなことはあまりなく、中間宿主という存在があるために人の方にもウイルスがやっけてきやすくなることになります。

H3N8 **Transmission of Equine Influenza Virus to Dogs**

P. C. Crossen¹, Edward J. Dubovi², William L. Catlett³, Ian Stephenson⁴, E. P. J. Gibbs⁵, Limai Chen⁶, Catherine Smith⁷, Richard C. Hill⁸, Tamara Ferris⁹, Justine Forney⁹, Rick A. Wright¹⁰, Maria-Jo Medina¹¹, Influenza Genomics Group,¹² Colin M. Johnson¹³, Christopher M. Glass¹⁴, Nancy J. Coull¹⁵, Alexander I. Klimov¹⁶, Jacqueline M. Katz¹⁷, Robert O. Donis¹⁸

Molecular and antigenic analyses of three influenza viruses isolated from outbreaks of severe respiratory disease in racing greyhounds revealed that they are closely related to H3N8 equine influenza virus. Phylogenetic analysis indicated that the canine influenza virus genome forms a monophyletic group consistent with a single interspecies virus transfer. Molecular changes in the haemagglutinin suggested adaptive evolution in the new host. The etiologic role of this virus in respiratory disease was supported by the temporal association of rising antibody titres with disease and by experimental inoculation studies. The geographic separation of the infection and its persistence for several years indicate efficient transmission of canine influenza virus among greyhounds. Evidence of infection in pet dogs suggests that this infection may also become endemic in this population.

Transmission of virus from one host species to another. Examples of this mechanism include the recent human infections with the H5N1 subtype of avian influenza virus (4, 5). The second mechanism is a consequence of the segmented nature of the influenza genome. Simultaneous acquisition of a host with viruses from different species can result in re-assortment of the segmented viral genes and the generation of a reassortant virus with the ability to infect other species. For example, reassortment produced the reassortant between avian and human influenza viruses involved in influenza pandemics in 1957 and 1968 (1, 2).

Most direct transmissions of whole influenza viruses from the natural host species to a different one do not result in sustained transmission in the new host species. Multiple

virus-host interactions are necessary for establishment and sustained transmission and provide a barrier to population of influenza virus in the new host (6). Therefore, establishment of new, long-lived host-specific lineages of influenza virus is uncommon and has only occurred in domestic poultry, pigs, horses, and humans (2, 3). In this report, we describe an unprecedented interspecies transfer of a complete equine influenza virus to the dog, and the emergence of a new canine-specific influenza virus associated with acute respiratory disease.

In January 2016, an outbreak of respiratory disease occurred in 22 racing greyhounds at a Florida racetrack (reporting online only). Two clinical syndromes were evident: a disease characterized by initial fever and then cough for 10 to 14 days with subsequent recovery (14 dogs) or a protracted death associated with lethargy in the respiratory tract (1 dog) for case-fatality rate of 30%. Postmortem examinations were performed on six of the eight fatal cases (10). All dogs had extensive hemorrhage in the lungs, mediastinum, and pleural cavity. Histological examination of the respiratory tract revealed necrotic bronchiolitis, bronchiolitis, and suppurative bronchopneumonitis (Fig. S1). The epithelial lining and airway lumens in these tissues were infiltrated by neutrophils and macrophages. Liver haemangiosarcoma (prevalent in this breed) was resected from three dogs and inoculated into a variety of normally healthy horses, ferrets, and cats (see text for virus culture) (8). The lung, haemangiosarcoma, and liver control experiments (all using the same control virus) (MCKC) epithelial cells cultured in the presence of ferrets and the cell culture supernatant (apoptosis and cell death) (9). A virus was purified by a conventional method (see Materials and Methods) (10,11) for detection of the nucleoprotein (NP) for detection of the nucleoprotein

482 **Science**, 2005, 310(5747): 482-485

Prolonged intermittent virus shedding during an outbreak of canine influenza A (H3N2) virus infection in dogs in three Chicago area shelters: 16 cases (March to May 2015)

JAVMA 2016; 248(9):1022-1026

Sandra Newbury (1)(X), Jennifer Godhardt-Cooper (X), Keith P. Foshee (1)(X), (1)(X), Frances Cappel (1)(X), Laura Balanoff (1)(X), Kathy Toohay-Kurth (1)(X)

From the Department of Medical Science (Newbury, Foshee, Balanoff) and Pathological Sciences (Cooper, Kurth), School of Veterinary Medicine and Biomedical Sciences, University of Wisconsin–Madison; (Cooper, Cappel, Toohay-Kurth), University of Wisconsin–Madison, WI 53706.

Address correspondence to Dr. Newbury (newbury@wisc.edu).

OBJECTIVE
To estimate an appropriate isolation period for dogs infected with canine influenza A (H3N2) virus on the basis of the duration of virus shedding.

DESIGN
Retrospective case series.

ANIMALS
16 dogs from 3 Chicago area shelters, naturally infected with canine influenza A (H3N2) virus.

PROCEDURES
Medical records of 16 affected dogs were reviewed. Nasal swab specimens from each dog had been tested periodically for a minimum of 15 days following an initial positive real-time reverse transcriptase PCR (RT-PCR) assay result for influenza A virus shedding. Antigen tests were purified, quantified, and sequenced by the Sanger DNA sequencing technique. Virus isolation and sequence results of canine influenza A (H3N2) virus from nasal swab specimens were obtained in conjunction with signalment, description of clinical signs, type of treatment, and outcome.

RESULTS
Viruses from each dog were identified as canine influenza A (H3N2) virus on the basis of DNA sequencing. The interval between first and last positive RT-PCR assay results ranged from 13 to 24 days, whereas the time interval from first reported clinical signs to last positive assay results ranged from 15 to 26 days. Isolation of canine influenza A (H3N2) virus was successful in the late shedding period from nasal swab specimens of 8 dogs 15 to 20 days after the first positive RT-PCR assay result and 18 to 20 days after the first clinical signs. Clinical signs resolved for all dogs the remainder in the shelters during the testing period.

CONCLUSIONS AND CLINICAL RELEVANCE
Dogs infected with H3N2 virus should be isolated for a period of 21 days following onset of illness. Even when resolution of clinical signs occurs sooner than 21 days, shedding of H3N2 virus may persist. (J Am Vet Assoc 2016;248:1022-1026)

J Virol. 2018 Jul 31;92(16):e00323-18.

Multiple Incursions and Recurrent Epidemic Fade-Out of H3N2 Canine Influenza A Virus in the United States

Ian E.H. Voorhes^{1,3}, Benjamin D. Dalziel^{4,5,6,7,8}, Amy Glaser⁴, Edward J. Dubovi⁹, Palio R. Marica⁸, Sandra Newbury⁷, Kathy Toohay-Kurth⁸, Shuo Su⁹, Divya Kirti¹⁰, Harm Van Baken¹⁰, Laura B. Goodman⁸, Christian Leutenegger¹¹, Edward C. Holmes^{12,13,14,15,16}, Colin R. Parrish¹⁶

Affiliations: 1 expand
PMID: 29975234 | PMID: 314626921 | DOI: 10.1128/JVI.00323-18
Free PMC article

Abstract
Asian-origin H3N2 canine influenza virus (CIV) transferred to dogs in Asia around 2005, becoming enzootic throughout China and South Korea before reaching the United States in early 2015. To understand the posttransfer evolution and epidemiology of this virus, particularly the cause of recent and ongoing incursions in incidence in the United States, we performed an integrated analysis of whole-genome sequence data from 64 newly sequenced viruses and comprehensive surveillance data. This revealed that the circulation of H3N2 CIV within the United States is typified by recurrent epidemic burst-fade-out dynamics driven by multiple introductions of virus from Asia. Although all major viral lineages displayed similar rates of genomic sequence evolution, H3N2 CIV consistently exhibited proportionally more nonsynonymous substitutions per site than those in African swine viruses, which is indicative of a large-scale change in selection pressures. Despite these genotypic

CDC Centers for Disease Control and Prevention **EID J.** 2018; 24(1):75-86

EMERGING INFECTIOUS DISEASES®

EO Journal | Volume 24 | Number 1 | January 2018 | Main Article

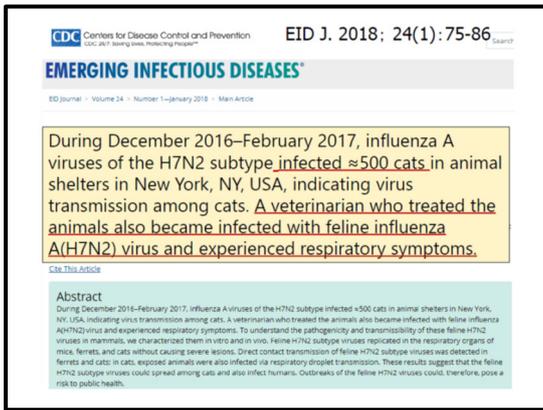
Volume 24, Number 1—January 2018
Research

Characterization of a Feline Influenza A (H7N2) Virus

Masato Hatai¹, Gongpu Zhong², Naoki Goto³, Noriko Nakajima⁴, Shigehiro Furi⁵, Shiro Chiba, Kazuhisa M. Deering, Mutsumi Ito, Masaki Imai, Maki Kiso, Sumiko Nakamura, Nagai Lopes, Andrew J. Thompson, Roger McBride, David L. Suarez, Catherine A. Macken, Shigeo Sugita, Gabriele Neumann, Hideki Haraguma, James C. Paulson, Kathy J. Toohay-Kurth, and Yoshihiro Kawakami

Author affiliations: University of Wisconsin–Madison, Madison, Wisconsin, USA (Hatai, G. Zhong, N. Goto, S. Furi, S. Chiba, K.M. Deering, T. J. Lopes, G. Neumann, K.L. Toohay-Kurth, Y. Kawakami); National Institute of Infectious Diseases, Tokyo, Japan (I. Imai, H. Haraguma, H. Hasegawa); University of Tokyo, Tokyo (M. Ito, M. Imai, M. Kiso, S. Nakajima, Y. Kawakami); The Scripps Research Institute, La Jolla, California, USA (A.J. Thompson, R. McBride, J.C. Paulson); US Department of Agriculture, Athens, Georgia, USA (D.L. Suarez); The University of Auckland, Auckland, New Zealand (C.A. Macken); Japan Racing Association, Tokyo, Japan (S. Sugita)

Abstract
During December 2016–February 2017, influenza A viruses of the H7N2 subtype infected >500 cats in animal shelters in New York, NY, USA, indicating virus transmission among cats. A veterinarian who treated the animals also became infected with feline influenza A (H7N2) virus and experienced respiratory symptoms. To understand the pathogenicity and transmissibility of these feline H7N2 viruses in mammals, we characterized them in vitro and in vivo. Feline H7N2 subtype viruses replicated in the respiratory organs of mice, ferrets, and cats without causing severe lesions. Direct contact transmission of feline H7N2 subtype viruses was detected in ferrets and cats; exposed animals were also infected via respiratory droplet transmission. These results suggest that the feline H7N2 subtype viruses could spread among cats and also infect humans. Outbreaks of the feline H7N2 viruses could, therefore, pose a risk to public health.



実は最近、犬や猫にもインフルエンザが見つかっていています。犬のインフルエンザではH3N8というタイプやH3N2というタイプで、アメリカで流行ったということです。猫でもH7N2というインフルエンザウイルスがアメリカのシェルターで結構流行ったということなのですが、そのアブストラクトに興味深いことが書いてありました。シェルターでH7N2インフルエンザが流行り、500頭ぐらいの猫が罹り、さらにはそこで働いていた獣医さんもそのウイルスに感染して症状が出たというのです。インフルエンザも結構危なく、それも、ペットを介してうつった可能性が示唆されたので、もしかするとコロナよりも問題としては大きいのかもかもしれません。実際にそれが大々的に起きてしまったら、一体ペットはどうなってしまうのかがものすごく心配です。

さて、それでは予定していた2時間が過ぎましたので、一旦今日の例会は終わりにしたいと思います。このあと

Fさん：先ほど話にあがっていましたが、動物愛護管理法の数値基準は環境省の方から案が出てきています。対象は第一種、第二種動物取扱業、動物愛護団体であり、一般の飼い主は対象になっていませんが、数値基準が入ことで業界は大変なことになると思います。その数値基準が厳しいということで犬や猫を手放してしまうと、行き場のない動物が大量に出てきてしまうのではないかとこの心配があります。

西村：それに対応する準備をしていないと、いきなり問題が露見する可能性があるということですね。ドカンと出てくる可能性も高いと。その他、何か興味のある話題やフリーなお話はいかがでしょう。

Oさん：最初の話題、「獣医療関係者はエッセンシャルワーカーか？」が大変興味深かったです。私は仕事上、西村先生にお世話になったこともあり、なくてはならない存在だと思っています。西村先生から東京都獣医師会の情報発信が早いから参考になるだろうとウェブサイトを教えていただいたのですが、そのような形で獣医師の方が情報発信してくださりすごく助かりました。東京都獣医師会からの発信を獣医師などがシェアする形で情報が広がっていたような印象がありますが、日頃獣医師の方はどのような連携を取っているのかを教えてくださいたいです。

西村：実はそこはあまりよく分かっていません。東京都獣医師会も最初の頃はよく情報を出していたのですが、しばらくするとあまり出なくなりました。

〇さん：私が勤めている NPO の理事長がアメリカ人なので、海外の一般市民の目線で海外の情報がいろいろ入って来ていました。その情報と、最初の段階で東京都獣医師会が発信したものが同じ内容でしたので、ファシリテイトックを続けるための対策をブレずに取れたというところがありました。大変助かりました。今回はたまたまだったのかもしれないようですが、これからも情報収集の参考にさせていただきたいと思います。

【話題提供：獣医師はステークホルダーの一人である“社会”に対してどう振る舞うべきか？】

<p>疾患発生数が減ることは</p> <p>人医療</p> <p>Pros 幸福度↑ 社会的コスト↓</p> <p>Cons 医療関係収益↓</p>	<p>獣医療</p> <p>Pros 幸福度↑</p> <p>Cons 獣医療関係収益↓</p>	<p>短頭種犬</p> <p>外鼻孔狭窄、軟口蓋過長などが多発 ⇒短頭種気道症候群</p> <p>ブルドッグ、フレンチブルドッグ、ボストンテリア、ボクサー、シーズー、チベタンパニエル、チャウチャウ、バグ、狎など</p> 
---	---	---

<p>通常の犬</p>  <p>ブルドッグ</p>  <p>フレンチブルドッグ</p>  <p>Types of Skull (dorsal view) Dolichocephalic, Mesaticephalic, Brachycephalic</p>	<p>短頭種気道症候群 (brachycephalic airway syndrome)</p>  <p>外鼻孔狭窄 軟口蓋過長 気管低形成</p>
---	---

ブルドッグが危機、遺伝的に似すぎ

ブルドッグたちは呼吸や骨格、皮膚の障害をかかえているしかも、多くの個体が自然に交尾したり出産したりできない
—NATIONAL GEOGRAPHIC 日本版
<http://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/16/080200285/>



BVA and BSAVA statement on brachycephalic breeds

10 May 2016

Following recent calls urging veterinary surgeons and their professional associations to take action to address the health problems experienced by brachycephalic dog and cat breeds, the British Veterinary Association (BVA) and the British Small Animal Veterinary Association (BSAVA) have a statement.

Following recent calls urging veterinary surgeons and their professional associations to take action to address the health problems experienced by brachycephalic dog and cat breeds, the British Veterinary Association (BVA) and the British Small Animal Veterinary Association (BSAVA) have issued the following statement:

BVA and BSAVA's members are seeing concerning trends in dog and cat health and welfare linked to the rise in ownership of brachycephalic breeds and we are unequivocal in the need for all those with roles to play – including vets, breeders, breed societies, the pet-owning public as well as others – to take action to combat the health problems that brachycephalic breeds experience due to extreme conformation. Both organisations are committed to using scientific evidence and data – now readily available – to understand and tackle extremes of conformation. BVA and BSAVA both strongly recommend that animals which show extremes of conformation that negatively affect their health and welfare should not be used for breeding.

西村：イギリスの獣医師会が、短頭種の変形が強いものはブリーディングに使わないようにしよう、というステートメントを出しています。これはブリーダーさんには結構な影響を与えるものです。

P 先生も参加していただいていたようですので、全体を通して何かご意見やサジェスションがあればお願いいたします。

P さん：楽しく拝聴させていただき、大変勉強になりました。日本だからアメリカだからというのではなく、動物を可愛がる気持ちは基本的にどこの国でも同じだと思うのですが、日本なりの事情があり、やり方があり、文化がありますし、特に安楽死についてはそれぞれのケースで考えていかななくてはならないと思います。その中でどう対処していくかについては、アメリカの場合はネグレクトについて非常に厳しいので、その辺りの背景があるのではないかなという感じがしました。

西村：せっかくの機会ですので一つ質問をさせてください。アメリカにはシェルターがたくさんありますよね。なぜたくさんあるシェルターを維持できるのかということなのですが、金銭面のことではなく、シェルターに入ってくる犬や猫がいなかったら維持していくことができないと思うのです。犬や猫が絶え間なくシェルターにやってくるということなのでしょうか。

P さん：今コロナなのでまた少し事情は変わりますが、基本的には閉まっているところが多いです。一般的には、オープンアドミッション、オープンアダプションという考え方で断らずに受け入れないなりません。もちろん、殺処分するかもしれないということも含めて説得はするのですが、愛情持って飼いなさい、自分で貰い手を探しなさいなどと言い過ぎたり断り続けたりすると、捨てられてしまったり、あるいは飼ったとしてもネグレクト状態になったりというケースもあるのです。ですから、結局は公共のシェルターは引き受けています。それでも民間の愛護団体は協力して、全体で80~85%ぐらいにまで譲渡率を上げています。譲渡の方もあまり厳しく制限してしまうと回らなくなってしまうので緩めにしています。オープンアダプションという考え方です。その代わり、飼えなくなった人に対してはコミュニティ全体でサポートしていく、というように考え方が少しずつ変わってきています。

西村：日本では終生飼育という言葉がかなり一人歩きしているところがあり、一生面倒を見なさい、一生面倒見ないと人間じゃないよ、という考え方が存在しています。そうすると、シェルターに持っていくこと自体が犯罪に近いことになってしまうのです。そのあたりの考え方が日本はアメリカと違うのではないかと思うのですが、アメリカでは飼い主がチェンジすることについて、それほど問題ではないというように皆さん考えているのでしょうか。

P さん：もちろん安易に手放してしまったり、結婚する彼氏がアレルギーを持っているからというような理由で手放すのは社会的に良くないとされます。仕事が忙しくてどうにもならない、引っ越し予定なのに無理して飼ってしまう、欲しいからと衝動的に飼ってしまう、というようなことも非難されます。ただ、世の中にはどうしても飼えな

くなることがありますよね。思いがけず亡くなってしまう、離婚、家庭内暴力、ドラッグ、犯罪、DV、チャイルド虐待、うつ病など、どうしても避けられない理由で飼えなくなってしまうことはあります。これらすべてを含めて、シェルターは、仕方がないから引き取りましょうというところがありますし、愛護団体なども文句をいながらも割と積極的に受け入れている状態です。もちろん基本的には日本と同じで、きちんと最後まで飼いましょう、途中で捨てるのは論外ですということなのですが、誰も彼もが100%最後まで飼わなくてはいけないというのはどうしても限界があります。ですからそこはある程度社会が広く見てあげるといふ風潮があると思います。

西村：社会全体のうち一定数の人が、人間の生活にはそういったことが起こりますよ、と考えていて、それを社会としてどのように受け止めるか、というシステムの一つとしてシェルターがあるという考え方で良いのでしょうか。

Pさん：そうですね。

西村：そのあたりが日本と捉え方が違うような気がします。日本の場合、シェルターにいる動物をゼロにするのが正しい方向である、という感じを受けるのです。そうすると、落ちこぼれてしまう動物というのもいっぱい出てくるのかなと。どちらがいいのかという議論はあるかと思いますが。

Pさん：少し日本の野犬と被るところで、アメリカにはピットブルの問題があります。100%みんな悪い子ではなく、もちろん良い子もいるのですが、ブリード的に突然咬んだりすることがどうしてもあります。最近、あまり殺さないで頑張りましょうとシェルターの中でピットブルが殺されずにいることが増えています。でも結局は誰も欲しがらず、ずっとシェルターに居ついてしまっている、ということが社会問題化しています。殺さない、でも出て行かない、日本の野犬問題あるいはその辺りを見ると、どこか被るところのある問題ではないかという気はします。

西村：非常に参考になります、ありがとうございました。ではそろそろ終了にしたいと思いますが、このWebを利用した例会をまた企画できればと思います。皆さん今日はどうもありがとうございました。

